
選ばれなくても勇者になってみる。

ジャングルタイテイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選ばれなくても勇者になっ

【Nコード】

N7452J

【作者名】

ジャングルタイテイ

【あらすじ】

むりやり勇者になった少年の物語。

ビギン！（前書き）

文法的な間違いがあつた場合や感想はコメントください。
人の意見が聞きたいです。是非

ビギン！

夢の中、少年が座っている。僕より4歳ほど年下に見えるが、虚ろな表情がなんとなく大人っぽく感じさせる。

「君は違うか……。」

残念そうな顔をして少年は言った。

「どうしたの？誰か探してるの？」

少年はこちらから視線をそらして不機嫌そうな顔をした。

「君には関係ないよ。」

少年がそういった瞬間、視界が真っ白になった。

上から吸い上げられるような感覚に襲われ、気がつくと、目の前にいつもの教室と黒板が広がった。

「授業中に寝ちゃったのか。」幸い先生には、見つかっていないようだ。

6時限目……今日最後の授業だ。

授業中だが、もう帰る用意をしてしまった。荷物が多いので、放課後にちんたら準備していたら達也においてかれてしまう。あいつはいつでもせつかちだ。

授業がすべて終わり、皆が靴を変えているとき、達也が急に口を開いた。

「俺、勇者に選ばれたかもしれない。」

一瞬、頭が混乱して黙りこくってしまった。

「それ、俺はどんな反応すればいいの？」

ギャグのつもりなのだろうか？笑えない。

「朝、学校に来る途中で道端に老人がいて話しかけられたんだ。今日の三時に空飛ぶ船が俺を迎えに来るんだ。異世界から来るモンスターたちが、現実世界に来るのを防ぐために異世界に行つて、その

根源を断つんだってさ。」

「お前、頭大丈夫？」

時計を見る。二時五八分。電波時計だから間違いない。

「あ……あれだ！」

達也が入道雲を指差した。確かに何か点が見える。

あれが船だというのだろうか？

「まさか……。」

勇者に選ばれた少年が、異世界を救いに行くなんてそんなベタな少年漫画みたいな展開があるわけない。

だが、そんなことを考え茫然としている間にも、点は大きくなり、船の形が確認できるまで、近くに来ている。そして赤毛の少女が達也にむかつて掴まれとでもいうように手を伸ばす。

RPGのヒロインにぴったりの美少女だ。

達也を止めなければならない。

「おい。ふざけんな。俺はおばさんになんて言えはいんだよ。達也！」

近くまで来るとわかるが、船はかなりのスピードだ。

「ごめん。でもこうするしかないらしいんだ。」

達也が手を伸ばすと、少女がそれを掴み船の中に連れ込んでしまった。

飛んで行ってしまった船を茫然と見つめ、しばらくして、ようやく言葉が出た。

「た……つ……や？」

不思議な魔法使いの爺さんに連れられて、達也が行ってしまった……。

警察に届けばいいのだろうか？

「信じてくれないよな。そんなこと。」

五分ぐらい僕はそこで空を眺めていた。何も考えられずただ足を動かし続けた。

どうしようか迷いながら歩くうち結局、家についてしまった。

なぜだか疲れた気がして、和室で寝転がった。

「どうすりゃいいんだ。」

おじいちゃんが大切にしていた日本刀ふと目に入った。なんでも選ばれた人物にしか抜けないらしい。

確かに、その日本刀が抜けたことが無いのだが、それは、多分錆ついているからだろう。

「選ばれた勇者……か。」

僕は一体これからどうすればいいんだろう。

「どうした？浮かない顔して。」

思わず飛び起きてあたりを見渡した。

どこからともなく夢の中の少年の声が聞こえた。

「おまえどこから俺に話しかけてるんだよ！」

恐怖で背中がぞおつとする。

「口からだよ。ちょっとその日本刀を手にとってみて。」

言われたとおりにおそろおそろ刀を持つ。とてつもない重さを感じる。昔の人はこんなものを振り回して戦っていたのか。

「それが僕だよ。」

確かに、声は、その刀から聞こえる。

「お前も魔法の道具か何かなのか？」

空飛ぶ船が友達を連れてってしまった上に、自分は今、刀に話しかけられている。

「まあそんなとこだよ。正確には妖刀って言うんだけどね。」

こいつを使えば達也を助けに行けるかもしれない。

「なあ、頼む俺を異世界に連れてってくれ。友達が行っちゃったんだ。」

「へ？」

素っ頓狂な声を上げる刀だ。

「異世界って何？」

「お前、知らないのか？」

友達が異世界に連れてかれてから、話しかけてくるようになった刀。だが、期待したような関係はその二つにはないようだ。

「そういうものは、知らないけど、もし、君が選ばれし者なら、僕の力を使って探せるかもよ。試しに僕を抜いてみなよ。」

「夢の中でお前は、俺は違うつていったっじゃん。」

期待が外れて気力がなくなってしまった。

「物は試しだよ。やってみないと」

塚を掴んで力を思いっきり入れてみる。

5秒ぐらいたつても、やはり鞘は動かない。

「君なんかじゃ無理か。」

僕は、達也を救えないのか？

「君なんかだと・・・」

カチンとくる言葉だ。ただでさえいろんなことがあってイライラしてるのにこいつは・・・。

「ふざけんなあああああああ！」

「あれ・・・え!!・・・。。。。呪いの力を物理的な腕力だけでこじ開ける気？」

「あああああああああああ!!!!!!!!」

ガチン！

刀はいきなり鞘を抜け家の柱を半分まで斬ってしまった。

「ああ、なんてことしたんだ！」

「刀抜いたぞ！力貸してくれよ！」

「選ばれし者じゃなきゃ僕の力は使えないんだ！無理だよ。選ばれし者以外が刀を抜いちゃうなんて僕でもどうなるのかわからないんだ。」

つづくよ！

ビギン！（後書き）

コメントください。大事にことなので二度言いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7452j/>

選ばれなくても勇者になってみる。

2011年1月15日23時14分発行